

きぶのちと

NO.45 月刊

昭和七年三月一日 発行
発行所 岡山県都窪郡吉備町東町一三三五宝地
吉備親光協会

八幡神社

当社は八幡山の頂に鎮座す。庭瀬駅から北へ約一軒で神社の前へ出る。八幡山は低い丘陵ではあるが、南一帯は平地にして眺望が廣く、北は吉備の中山に連続し樹林に包まれた清浄な境域である。正面に御手洗所があつて、ここから左に曲つて石畳の参道を辿ると唐獅子と華表がある。手水鉢は横一六六粒、縦八六粒、高さ五五粒の大きな石段を加工し、上部を廿四粒の深さに彫つて水滴をつくつてゐる。前面に 延宝十五丁巳歳 八月吉日 施主 戸川重右衛門 戸川新右衛門 角南平右衛門 岡辰之助

とあり。後在修葺のため下部の名がなればコンクリートにて埋められ、川安風が死か去れた三年前で、施主はいづれもその家臣中重要な地位にある人物ばかりである。(第六輯 支配者層 戸川達寿参照) 華表を潜ると両側は石欄干付の石段である。十米ほど登ると、ここに石畳の神門は構造からして優美な建造物である。社殿を回す部厚、築泥塚と、この神門の外には左の石燈籠が置かれてゐる。石段の両側は左の石燈籠が置かれてゐる。昇り口から 唐獅子 一對 天明三年十月十五日 東平野村中 在話人 惣右衛門

石燈籠 一對 天明三年十月十五日 東平野村中 在話人 惣右衛門

石欄干は天保二年八月の建立で、右側の各支柱に刻んである寄進者の銘を順序に記すると

- | | | | |
|--------|---------|------------------------|------------------------|
| 奉寄進 | 福智屋 重兵衛 | 天保二年八月 庭瀬町 在話人 福智屋 重兵衛 | 天保二年八月 庭瀬町 在話人 福智屋 重兵衛 |
| 本嶋屋 | 七郎兵衛 | 今保屋 | 熊之助 |
| 備前屋 卯七 | 権屋 権吉 | 岡匠屋 | 仙右衛門 |
| 中屋 | 吟藏 | 岩見屋 | 長五郎 |
| 福池屋 | 宇兵衛 | 上仁屋 | 貞四郎 |
| 福知屋 | 幸治郎 | 高島屋 | 幸多七郎 |
| 岡田屋 | 新三郎 | 加名屋 | 永藏 |
-
- | | | | |
|--------|--------|---------|---------|
| 奉寄進 | 庭瀬屋 曾平 | 中野屋 | 豊助 |
| 中野屋 | 仁平 | 今保屋 考兵衛 | 松屋 竹平 |
| 川野屋 | 久右衛門 | 岡屋 | 助右衛門 |
| 宝満丸 | 嘉五郎 | 今屋 幸兵衛 | 松三郎 |
| 手松屋 | 増三郎 | 早島屋 平八 | 中島屋 糸 |
| 庭瀬屋 | 助八郎 | 岩屋 久七 | 永野屋 作四郎 |
| 丸屋 文五郎 | | 加名屋 | 永藏 |
-
- | | | | |
|---------|------|--------|--------|
| 中屋 | 理兵衛 | 花尾屋 仙吉 | 田所 久兵衛 |
| 今治屋 | 長右衛門 | 田所 藤兵衛 | 同 代五郎 |
| 奉寄進 福智屋 | 庄五郎 | 本町 | 要藏 |
| 金右衛門 | 辰蔵女 | 亥蔵女 | |
| 同人 取次 | 卯蔵女 | 申蔵女 | |
| 同 甚蔵 | 六治郎 | 同 七右衛門 | 源吉 |
| 同 西屋 | 同 周治 | 同 勝藏 | 宗吉 |
| 同 徳芳 | 安治郎 | 浅右衛門 | |
| 同 金治郎 | | 同 佐大夫 | 栄吉 |
| 同 長五郎 | | | |

同
 新六 金大夫 長三郎 五郎吉、馬之助 久兵衛傳治郎、久米吉 宇助 惣右衛門 今村屋 多八 久米蔵、龜吉 多助 新助、音吉、傳蔵 久四郎 吉田多平 吉蔵 音右衛門、四郎兵衛 長五郎、良蔵 小助 左治郎 近藤傳左衛門 常右衛門 佐右衛門 辨蔵、忠吉 直治郎、岩平 東平野村 重平

同
 奉寄進 太田傳四郎 三三で随神門で終り更に神門に至るもの 奉寄進 中田村又八 吉井屋 庄助 岩津屋 甚治郎 七兵衛 牙場屋 龜蔵 坂田屋 長五郎 尾上屋 理吉 民蔵 中村屋 清吉 玉井屋 久四郎 備前屋 宗八 内田屋 全蔵 安太郎、圓蔵 藤治郎 菊太郎、岩治郎 松野屋 民治郎 小野屋 金平 花尻屋 仲蔵 油屋 全治郎 今津屋 宇三郎 松屋 仁右衛門

同
 内田屋 富吉 長蔵、岩蔵 韶屋 嘉兵衛 魚屋 富八 伊兵衛 久平 田丸屋 多兵衛 安左衛門 田丸屋 吉左衛門 長野屋 勘治郎 岩助 糞屋、竹太郎、紋吉 森川氏、文六、定八 新屋 甚七 長七、元右衛門 玉屋 源治郎 川野屋 虎吉 木屋、為治、嘉四郎 太田屋 孫太郎 平治郎 塩屋、藤四郎、宇吉 中田村 長左衛門 奉寄進 目代 組頭 久兵衛 八左衛門 三

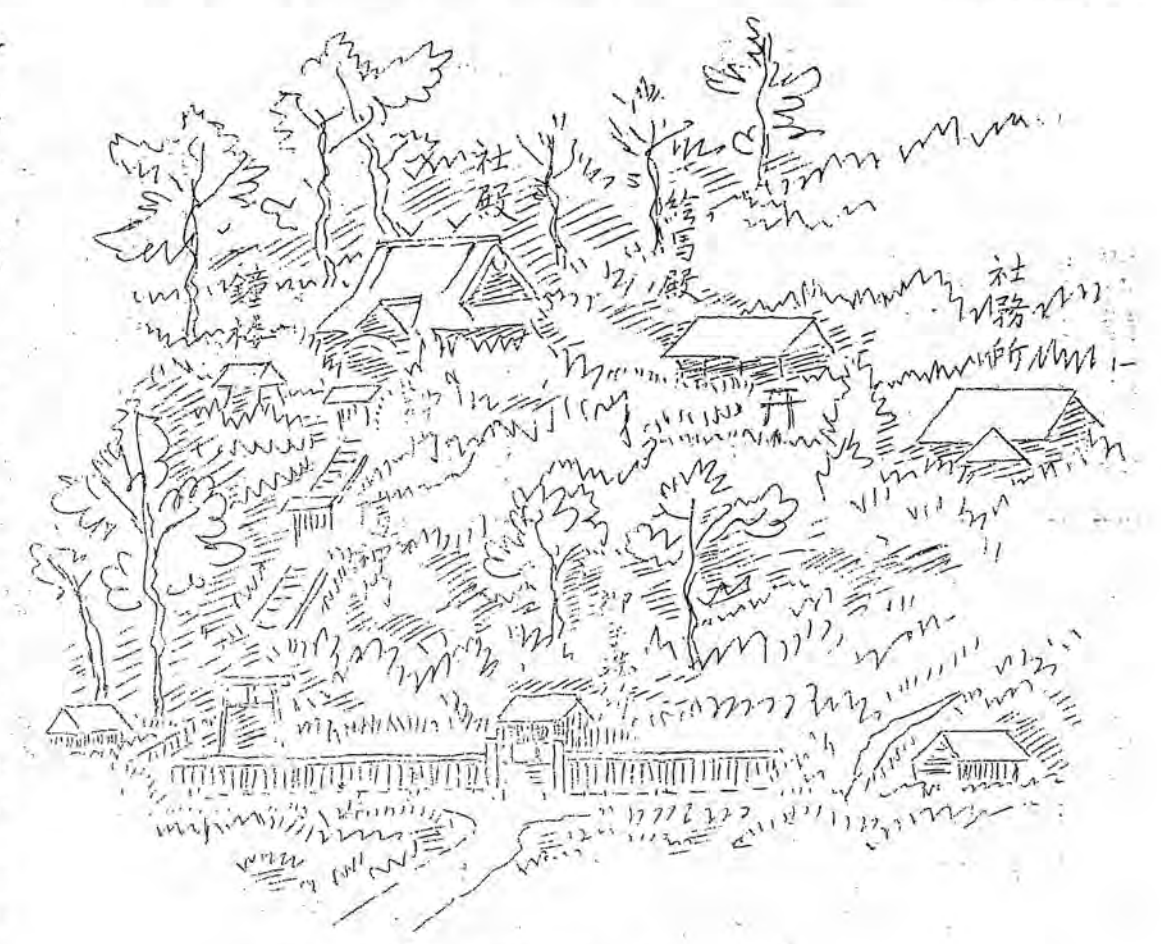
天保二年辛卯 仲秋
 (目代は目付役で、村中の保安上の取締をする役人。また組頭は庄屋、百姓代とともに村方三役といわれ、民の投票や会議の結果決められるもので、年寄とか長百姓ともいわれる村政の補佐で政治機関の最も末端の役である。)
 左側の石堀干の各支柱に刻んであるもの

奉寄進 今屋 吉五郎 組頭 忠五郎 吉屋 藤蔵 口口平八郎 平七次 新吉、文太郎 岩治郎、松蔵 幸右衛門 音兵衛 口五郎、文八、喜治郎 奉寄進 組頭 忠治郎 老屋、藤三郎 佛中屋、傳吉、善八 能心蔵 同 宇吉、和七、定吉

同
 源治郎 喜多屋 理兵衛 吉兵衛 老屋音七、花屋忠蔵 文吉、加納屋、吟蔵 葛屋 萬治郎 福山屋嘉蔵、浜屋、清七 幸右衛門、彌吉、共左衛門 平野屋 紋六 三河屋、松三郎、文蔵 久治郎 嘉四郎、共四郎 仲蔵、口屋、老蔵 友蔵 大黒屋喜三郎、林蔵 野崎勘四郎 治四郎 兵吉、源蔵 宗三郎 久助、彌五郎 崇吉、源吉 伊三郎 吉蔵、甚八 仙太郎、彌四郎

同
 兼吉 市太郎、龜吉 伊兵衛、藤屋、源五郎 沖分庄屋 四郎七 市兵衛、金蔵 仙松 吉平 新左衛門 平野屋三治郎、萬蔵 官治、助三郎 奉寄進 野崎熊太郎 平野村 周右衛門 三三で随神門で終り更に 奉寄進 新屋 嘉四郎 今村屋 八大夫 音吉、梅吉 音吉、梅吉 彌助、幸太郎、市蔵 彌五郎 治助、梅蔵 金十郎 左助、善蔵 長野 治右衛門

同 吉田屋 儀右衛門
 同 中田屋 吉五郎
 同 山口屋萬助 甚助 喜助
 同 觀音堂 儀助 岩吉
 同 藤屋 九助
 同 彌四郎 岩太郎
 同 千代 久理 豊久
 同 忠吉 長五郎 興助
 同 熊治郎 代吉
 同 新五郎 岩屋武助
 同 見吉屋 吉兵衛
 同 金五郎 宇吉 松兵衛
 同 稲葉屋 音吉 甚藏
 同 喜兵衛
 同 萬屋勘治郎 紺屋辰藏
 同 北國府屋 久米治
 同 庄兵衛 傳藏
 同 鍛冶屋 藤兵衛
 同 藤太郎
 同 音兵衛 久米太
 同 風呂屋 熊代氏 原氏
 奉 寄進 西村 忠右衛門
 永松屋 八右エ門
 天保二年辛卯 仲秋



八幡神社之圖

寄進してがら百余年の年月が流れていゝる。
 この人々の縁故者がいまだうなつていゝるこ
 とが、調べてみたものである。

神門の左手に鐘樓がある。
 もと神鐘があつた。大東亞戦争に供出したもので、その銘に「南無妙法蓮華經」の題目が刻んであつた。往昔は本地垂迹によつて曰蓮宗不変院が別当を取勤めていたが明治の改革によつて神佛分離し新しく神官が奉仕するようになった。この六字の題目は削り取られ、永く跟跡を残していたという。終戦後十三年を経た昭和十三年に神鐘再興の議が起り、氏子中から寄附金を募つて漸く鑄造せられた。当日は氏子中の切見五、六十人が稚子の服装にて、釣鐘を引き午前八時、庭瀬駅前を出発し、平野、本所、中田等を繰り歩き、正午迄に八幡神社へ着き、午後は奉懸の式で終つた。

釣鐘の寸法は
 総丈 一三二釐（龍頭部は三釐）内口径五六釐、縁六釐
 銘に「五穀豊饒 商売繁盛」氏子崇敬者除災諸願成就一一八幡神社
 昭和三十四己亥年十月秋大祭吉日 再鑄奉懸 奉賛会

周囲に寄進者の氏名を列記して、主なものを掲げ、他は略す
 金一萬五千円 在米 鈴木鉄野 金一万円 吉備町 平松禎三郎
 同 同 鈴木松造 同 同 昭本猪三男
 金一万円 岡山市 秋田秀穂 同 同 渡辺精次
 在米 國富こみか 寄附金は総額四拾余万円に達
 東京都 秋田貞夫 し、釣鐘は二十余万円であつ
 倉敷市 佐野嘉内 た、う。

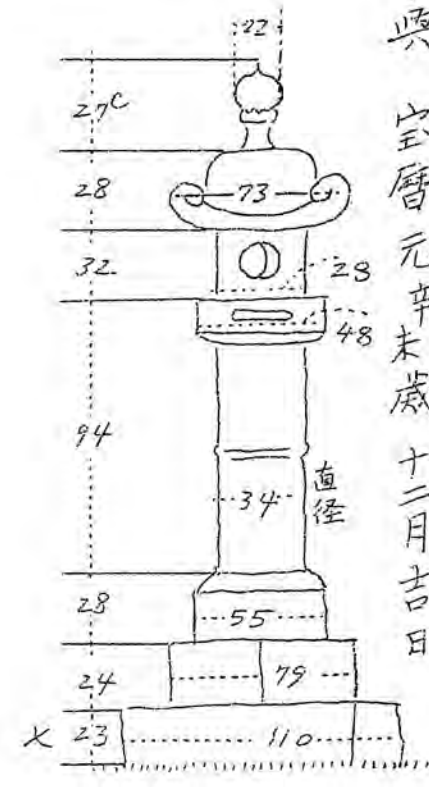
神門を入つた両側に花崗岩造りの灯籠が三對ある。銘に
 一、灯籠 一對 八幡宮 風呂屋口 氏子中 享保五庚子歲十一月吉日
 二、 〃 〃 〃 頼主当社 日參講中 享保廿一丙辰 曆正月吉日
 三、 〃 〃 〃 奉灯 昭和六年八月 当所 高橋始之郎

神門の外、西側に
 灯籠 一對 明和三年丙戌 秋九月吉祥日
 下部台石に 奉寄進永代為神社 河入村内宮下田彦反六畝
 高茂石五斗六升、平野村内祈進 畑彦畝式指五歩
 高志斗八升四合以上

發起世話人 永井孝次郎
 右 頼主 野崎大平治 近藤義平太 永井安之助 佐藤孫次郎
 吉田孫兵衛 難波源次郎 難波長兵衛 近藤此右エ門
 野崎傳兵衛 住野平蔵 林助七 平松彌八郎
 田地世話人 佐藤助右内 高畠多七 井上新兵衛 安井藤三郎
 武南紋兵衛

拝殿のすぐ前に
 灯籠 一對 花崗岩造りにして、高さ二五六糎、銘に
 從五位下 板倉根津守 源勝興 宝曆元年辛未歲 十二月吉日

△
 これは三代庭頼藩主の寄進になる
 ものである。
 拝殿は間口七五〇糎、奥行七〇〇糎に
 て 三方に幅二五糎欄干付の廊下を
 めぐらしてゐる。構造は入母屋造
 り総檜皮葺にして前面に破風をつ



△
 け、向拝を設けてゐる。正面には「八幡神社」と大書し、左傍に「皇太
 神宮彌宣天鬼通命裔 正三位男爵 荒本田神主奈園 謹書」とした懸額
 がある。これは庭頼の人、岩田宗平が昭和六年に彫刻を施して献納し
 たものである。

内部には平沼騏一郎謹書の「皇明光日月 昭和戊寅春」とした額が
 ある。(騏一郎は津山の白藩士にして第二次世界戦争に戦犯者として巣鴨刑務所に収容中病
 死した人である)。また宇垣一成謹書の「敬信崇祖」の額がある。(一成は赤松右
 邸もと湯瀬村大内の出身にして陸軍大臣、朝鮮総督などを歴任し、昭和廿八年五月参議院議員に全回
 最高点で当選した。同廿九年五月廿五日八十八歳で病死した。昭和廿九年に内閣組織の大命を拝したが、その軍
 部関係者の反対に遭つてその実を結ばなかつたことは有名な話である)。

△
 大養木堂翁が庭頼町青年団のために白地の絹布に墨線鮮かな筆でか
 かれた団旗を額に納めて懸げられてゐる。これは庭頼、撫川の両町が
 合併した昭和十二年五月五日に記念として奉納したものである。
 拝殿から幅四九〇糎、長さ四〇〇糎の渡殿によつて幣殿がある。幣殿は幅六〇
 〇糎、横三〇〇糎で、ソグれも檜皮葺である。

△
 本殿は高さ二〇〇糎、四方五五糎の石垣の上に瑞籬をめぐらし、その中央
 に檜皮葺一間社流造りの宮を安置してゐる。
 本殿の背後台石に、御本殿扛起並に修繕、社掌 佐野禱吾 顧問
 大養 董 有松靈峰、牧千太郎。總代并に建築委員 高橋忠五郎
 香川嘉保 御船重太郎 高畠修二 岩田宗平 國富一太
 昭和十二年五月吉日

△
 其他寄附者数名を列彫してゐる。
 本殿の東に二〇〇糎に四〇〇糎の入母屋造り本瓦葺給馬殿がある。
 給馬殿には左の額がかかゞられてゐる。

敬道の筆になる「堤忍 百戦百勝 一如一忍 戊午暮春」とある。
 (敬道は撫川大庄屋藤波氏の出に於て、嶋清宗、徳徳寺の僧となり、書画をよくした人にして、これは安政五年の春、三十七歳の時の筆である)。

葦山の筆になる神功皇后武装の姿にして、其の傍に武内宿禰が幼ない王子を抱いてゐる絵である。(神功皇后は仲哀天皇の后妃にして、自ら朝鮮征伐に出陣中王子を生ませられた。これが後少の鹿神天皇にして武内宿禰はその重臣である)。

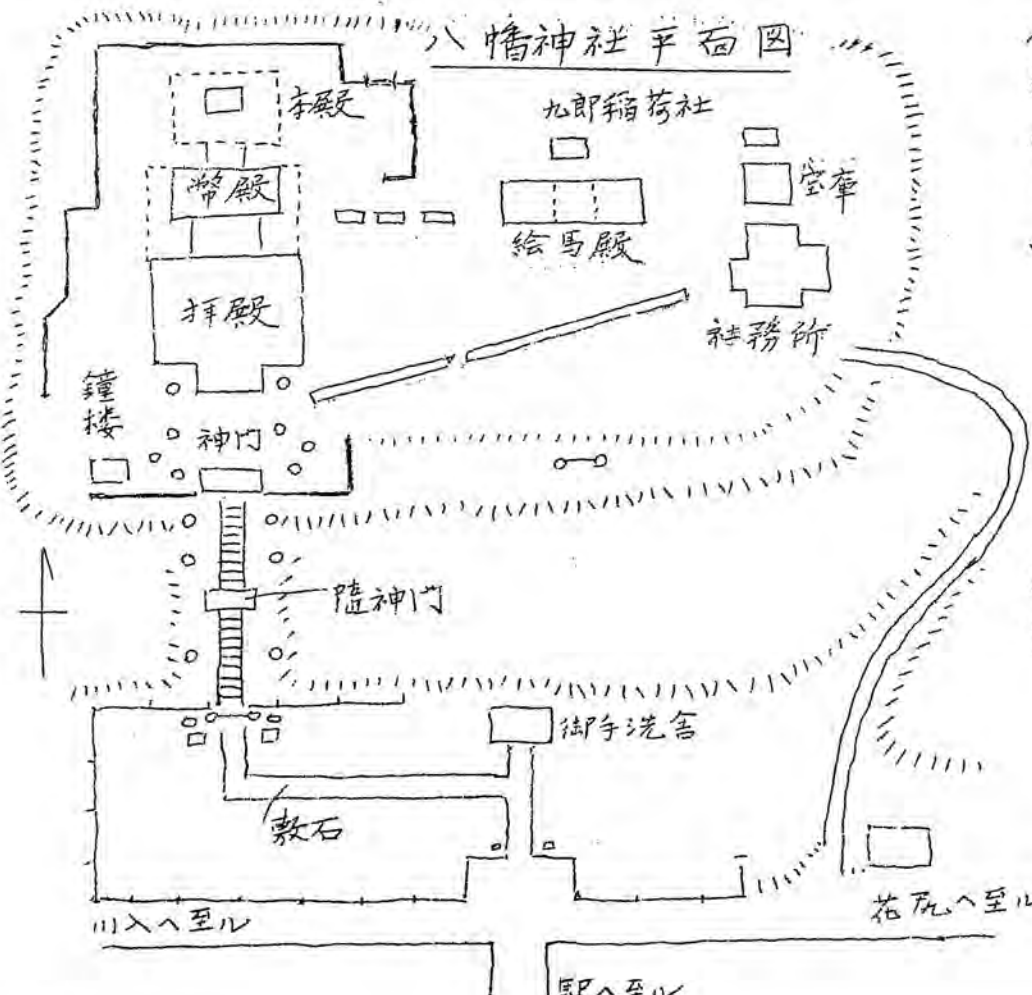
東西大相撲の番付、縦一三五種、横八八種のもの
 東方大関 谷の音喜市 関脇 真力鉄蔵 小結 鬼鹿毛清七 (以下畧)
 西方大関 辰ノ源吉 関脇 真鶴政吉 小結 鶴島常七 (以下畧)

東京取締 高砂浦五郎 雷 権大夫
 大阪取締 中村荒吉 三宅彌太郎
 東京年寄 片男浪藤三郎 頼人 大熊助七 差添人 中島忠吉
 在詔人 黒嶋明老 虎渡年二郎 僊石藤蔵 三宅芳二郎 三宅傳二郎

等一行八十余名の名前が載つてゐる。この額の縁に小さな板片を打ちつけてこれに「天及劔及卯三郎 本歳十三年四月 目方三拾五貫目一人お儀入仕候也」と書き添したてある。(これは明治廿五年六月廿三日から鹿瀬信城寺境内にて三日間、東西合同の大相撲を興行した時のもので、連日恵まれた晴天が続き、近郊からの見物客が押し寄せ、大満員で札止の盛況であったといふ)。

繪馬殿の後ろに九郎稲荷の一祠がある。手野にある九郎稲荷は当社の分霊を勧請したものと傳へらるゝ。座敷に藤田桂林と

野崎廣夫の額がある。△ 当社の創始については社傳によると、清和天皇の貞観二庚辰八月十四日(八六〇)に備中守に任ぜられた藤原宗弘が始めて宇佐八幡宮の神靈を勧



請レ祭祀した。祭神は、うまでもなく武神として祭らる仲哀、應神神功皇后の三柱である。上右この沖合は一面の青海原にして東西の船舶の航海路であつた。神功皇后が三韓との交渉を終え凱旋の途次、ここに停泊せられ海上の平安を祈誓し給ふたという由緒ある土地である。(おわり) 未完

鮮魚酒類。氷卸小売。

進魚 岸本商店

本社 吉備町中撫川電三四
 営業所 岡山電②七九〇六
 水島電 九三一〇

本店 西花尻
 支店 本町 電二〇〇乙

酸素製造販売。カーバイト
 熔接アセチレン。プロパン
 電気熔接機。其他熔接材料一式